

[別紙 2]

論文審査の結果の要旨

申請者氏名 永松 美希

有機農業と有機食品をめぐる先進国の市場環境が、90年代に入って大きく変化しつつある。とくにEU諸国では食の安全に対する消費者の強い関心を背景に、有機食品の国際市場が成長し、食品産業の有機食品部門への参入が活発化している。本論文は、有機牛乳と有機乳製品（以下、有機牛乳）に着目し、農業経営から食品加工を経て流通に至る供給システム（以下、フードシステム）を研究の対象としている。有機農業の歴史や農業協同組合の制度基盤の違いなどを反映して、同じ差別化食品でありながら、有機牛乳のフードシステムは地域によって異なった展開をみせる。本論文は、EU5カ国とスイスの計6カ国を取り上げて、有機牛乳フードシステムの代表的な類型を識別するとともに、その成立の根拠を実証的に明らかにしたものである。

論文は、研究問題を整理した序章と今後の課題を述べた終章を含め、全9章からなる。第1章では、食をめぐる新しい研究パラダイムであるフードシステム論の展開をレビューし、ヨーロッパにおける実証研究の到達点を整理している。また、農業経営と食品産業の特徴的なつながりを強調するさいには、アグリフードシステム概念を用いることを提唱した。

第2章では、EUの酪農と食品産業の特徴について、集中度を中心とする産業組織論の尺度を用いて整理した。注目すべき動向として、乳業メーカーの多国籍化と寡占化や、大規模量販店への市場集中の進行が指摘された。第3章と第4章は、有機牛乳フードシステムをめぐる制度と政策の展開をトレースしている。第3章ではケーススタディの対象国における有機畜産規則の制定からコーデックスによる共通ガイドラインの策定に至るプロセスを整理し、第4章では同様に国レベルの有機酪農奨励政策と共通農業政策における振興策を取り上げて、それぞれの進捗状況について横断的に比較している。

第5章は、有機食品専門店に主導された有機牛乳フードシステムの典型として、ドイツのケースが克明に分析される。すなわち、ルドルフ・シュタイナーの思想的影響下にあった有機農業の歴史がヨーロッパ最大の有機食品市場の形成につながり、流通についても伝統的で小規模な有機専門店のシェアが高い構造を生んでいる。有機牛乳の場合も、農場から少数の乳業メーカーに集約されたチェーンが小売段階でふたたび細かくセグメントされる砂時計構造を特徴とする。さらに第5章では、同じく専門店主導のシステムのもとにあるオランダについて、有機酪農と慣行酪農の生産性と収益性の詳細な比較を試み、有機酪農が総合的に20%高い所得形成力を有することを検証した。

第6章は、協同組合がチャネルリーダーであるデンマークとスイスを分析する。デンマークでは多国籍乳業メーカーを擁する大規模農協がリーダーであり、スイスではミグロとコープに代表される生協が有機牛乳フードシステムをリードしている。もっとも、デンマークにおいても小売は全国を商圏とする生協の店舗を主体としており、しかも、店舗の形

態はスイスの生協と同様にスーパーマーケット方式である。つまり、協同組合主導の有機牛乳フードシステムは大型量販店主導のそれと共通点も多い。

第7章で分析する大型量販店主導型システムの代表はイギリスであり、国内の有機牛乳生産者や加工メーカーと量販店のあいだで直接に継続的取引関係が形成されている点に特徴をもつ。分析を通じて、量販店はメーカーに対する拮抗力の領域を超えて、フードシステムの構造形成そのものをリードしている点が明らかにされた。典型例であるセイNZベリーは、生産者を傘下に組織化するのみならず、国外の製品にも関与する有機専門卸売をみずから設立している。既存の卸の機能が比較的小さい点は、もうひとつの量販店主導国オーストラリアの食品市場にも共通している。

最後に第8章では、5章から7章において特徴が明らかにされた複数の有機牛乳フードシステムについて、表示や基準のありかた、コストと収益性、価格と助成金などの切り口から横断的な比較と、さらに深めるべき論点の整理を行っている。

以上を要するに、本論文は近年のフードシステム論の成果をヨーロッパの有機牛乳に応用したものであり、6カ国のシステムの比較分析を通じて3つの基本類型を識別するとともに、それぞれの歴史的・制度的な背景を明らかにしている。本論文によって提示された比較システム分析の手法は、他の農産物にも適用可能である。加えて比較の過程で得られたファインディングスは、わが国の酪農品や畜産物のフードシステムや政策手段のありかたにも、数々の示唆を与えている。このように本論文の成果は学術上、応用上寄与するところが少なくない。よって、審査員一同は本論文が博士（農学）の学位論文として価値あるものと認めた。